

# 見えないチカラとキセキ

浦田 理恵  
竹内 由美

浦田理恵さんは、二〇二二年ロンドンパラリンピック女子ゴールボールの金メダリストです。浦田さんは、二十歳のときに、視力が低下し、左目の視力はなく、右目に少しだけ光を感じるという状態になりました。「見えなければ何もできない。」と落ち込み、一人暮らしの家に引きこもってしまう浦田さんでしたが、家族や友達に支えられて、自分が一歩踏み出さないと何も変わらないと思うようになりました。

私（竹内）は現在、浦田さんが所属する障がい者スポーツ選手雇用センターの職員として、公私にわたり彼女と行動をともにしています。この文章は、浦田さんの講演をもとにして、私が書いたものです。皆さんには、浦田選手の講演を楽しむように読んでいただくため、あえて「私（浦田理恵）は〜」という表現方法で書きました。ですので、文章中の「私」は、浦田さんを指しています。

自分で決めて勇気を出して一歩踏み出す。そうすると、また新たな世界での出会いが広がりました。そう、それがゴールボールだったのです。

二〇〇四年アテネパラリンピック。ちょうどその頃鍼灸・マッサージの学校に通っていた私は、学校のテレビでクラスメイトとゴールボールの試合を見ていました。

「見ていた」といっても、もう視力はほとんど残っていませんでしたから、テレビの実況や、一緒に見ている友達の説明を聞いて観戦していました。

私たちが見ていたのは、ゴールボール女子の三位決定戦。興奮するアナウンサーが、日本女子チームの銅メダル獲得の瞬間を伝えていました。その試合は、私には衝撃的でした。この人たち、ホントに目が見えんとかいな。

見えない状態で、コートの中を自由に走っているなんて。世界の舞台で戦っているってスゴイ。自分をめいっぱい表現して、戦っている彼女たちの姿が私には非常にまぶしく映りました。わあ、いいなあ。カッコイイなあ。私もやってみたいな。テレビや本などを見て、そう思うことってよくあると思います。でも、そこで実際に一歩踏み出して行動するのか。思っただけで終わらせるのか。そこが、運命の分かれ道だと思っのです。

世界の舞台で自分自身を全身で表現して、私もあんなふうに輝いてみたい。私はテレビを見て感動したあと、すぐに行動しました。

驚いたことに、ジャパンチームのヘッドコーチが私の学校の体育教官だったのです。私ってなんてツイてるんだらう。私は勢い勇んで、放課後のゴールボールの練習場に飛び込みました。



ロンドンパラリンピックで優勝し、チームメイトと抱き合って喜ぶ浦田さん（写真中央）

右1 【「パラリンピック」】主に肢体不自由の障がい者を対象とした国際スポーツ大会。四年に一度、オリンピックと同じ都市で開催される。

右1 【「ゴールボール」】視覚障がい者の球技。目隠しをして、鈴の入ったボールを相手ゴールに入れることで得点を競う。

右1 【「ヘッドコーチ」】スポーツにおいてコーチ団の中心になる主任コーチ。

「アテネパラリンピック見ました。感動しました。私もやってみたいです。」

頬を紅潮させ、興奮ぎみにまくしたてた私に、

「うーん。君、体力なさそうやね。」

江黒直樹先生は、冷静に上から下まで私をじっと見て第一声、そう言いました。

そうです。実は当時の私は腕も足もひよろひよろ。運動なんて無縁の女の子だったので。中学・高校の体育の成績は、五段階評価の二か三がいいところ。目が悪くなる以前は、運動が本当に苦手でした。ゴールボールを始めて金メダルをとるなんて、学生時代の私には想像もできなかったと思います。

「じゃあ……まず歩こうか。」

私の勢いをそぐように、江黒先生からは思いもかけないひと言が返ってきました。

「おかしいなあ。ゴールボールをしたいって言ったはずなのになあ……。」と思いながら、ルームランナーの使い方を教えてもらいました。

私たち視覚障がい者は、よくあるスポ根ドラマのように、「グラウンド走ってこい。」なんて言われても、一人では走れません。ですから、まずはルームランナーで歩くことからスタートです。最初は二十分。

「先生、二十分終わりました。」

「あっそう。じゃあ四十分ね。」

次は四十分かけてウォーキング。それができたら、今度は二十分ランニング。次は、四十分、一時間……。

私の競技人生は、普通の人よりもはるか下のレベルからのスタートでした。



コート練習では、アイシェードを着ける前から見えない状態なので、ボールがどこから来るのが全くわかりません。「ボールが来た。」と思って、ディフェンス姿勢をとってもボールは既<sup>すで</sup>にゴールの中。

もともと運動が苦手な私は、見えている頃からすばやく動くということができなかったのですが、見えなくなって更に動きが遅<sup>おそ</sup>くなっていました。

ディフェンスも、できている人の動きを見て覚えるということはできません。他の人と比べて、自分がどのくらい遅<sup>おそ</sup>れているのか。フォームはできている人と比べてどう違<sup>ちが</sup>うのか。見えないからわからない。もう、わからないことばかり。

諦<sup>あきら</sup>めそうになる私に、体を張って教えてくれたのが、江黒先生と、代表チームの小宮正江選手でした。

「じゃあ……理恵。私のフォームを触<sup>さわ</sup>ってみて。」

目で見られない私にわかるように、小宮選手は何度も自分のディフェンス姿勢を触<sup>さわ</sup>らせてくれました。

そうか。私のディフェンス姿勢と、手の角度が違<sup>ちが</sup>うんだ。足もこうやってまっすぐ力を入れて伸ば<sup>の</sup>すんだ。

小宮選手のディフェンス姿勢を何度も触<sup>さわ</sup>らせてもらううちに、だんだんと自分のできていない

3 【アイシェード】ここでは、ゴールボール用の目隠<sup>めかく</sup>しのこと。



ゴールボールの試合風景。アイシェードを着用した1チーム3名のプレーヤーで対戦する。

きも、もともと運動が苦手だった私は、「このくらいでやめようかな……。もうキツイし。」などと何度も思うのですが、その隣となりで歯を食いし

われたことでしょう。地味な筋力トレーニングなどをやっているときも、もともと運動が苦手だった私は、「このくらいでやめようかな……。もうキツイし。」などと何度も思うのですが、その隣となりで歯を食いし

また、仲間は私がコートでミスをする、「失敗してもいいから思いきってやってみて。理恵リエがミスしたぶんは私がカバーするから。」と声をかけてくれました。「次も失敗したらどうしよう。」と下を向いていた私は、何度その言葉に救

「ミスしてもいいよ。何回ミスしてもいいけど、同じミスはするなよ。」 たとえミスをしたとしても、なぜミスをしたのかを考え、工夫して再チャレンジすれば、それはミスじゃない。同じミスをしたり、諦あきらめたリしたときが本当の失敗だと、先生はわかりやすい言葉で励ほましてくれたのです。 信頼しんらいにつながっています。 失敗したとき、先生からよくこんな言葉をも

江黒先生はここだけの話、怒るととても怖いですが、でも、めちゃめちゃ怒るけど、できたところはしっかりと褒めてくれる。いいところも悪いところもちゃんと見ていてくれる。その安心感が

仲間と自分を比べて、そんな思いがふとしたときに頭をよぎります。それでもやめなかったのは理由がありました。一つは仲間とコーチの存在です。 自分にはセンスがないな。やっぱりやめようかな……。 仲間と自分を比べて、そんな思いがふとしたときに頭をよぎります。それでもやめなかったのは理由がありました。一つは仲間とコーチの存在です。

部分がわかってきました。 今度は、私が修正したフォームを、小宮選手に触さわって確認・再修正してもらいます。しかし、そのときできたと思って、次にやる時にはできていなかったり……。見えないぶん、体で覚えるのはとても時間がかかりました。 運動が苦手な私は、できるようにするまで人の何倍もかかります。それでも、小宮選手は私ができるようになるまでつき合ってくれました。



練習をする浦田選手（左）と小宮選手（右）

ばってがんばっている先輩の姿に、「私も、もうちょっとがんばろう。」と刺激をもらいました。口先だけで、「がんばれ。」「がんばれ。」と言うことは誰だっでできます。でも、先輩や仲間と一緒に考え動いてくれ、私が気づくまで待っていてくれました。そして、ゴールボールをやめなかったもう一つの理由は、自分と本気で向き合ってみたかったからです。

私は、訓練学校に通い始め、ゴールボールと出会ってから、ちょっとずつではありますが前向きに考えられるようになっていました。でも、やっぱりどこかで「見えない」ことを理由に逃げ腰こしになっていいるもう一人の自分を感じていました。

私って、このままだってでも「見えない」ことを理由に言いわけし続けるのかな。「見えない」ことから一生逃のがれられないのかな。

そう考えたとき、「このままじゃ嫌だ。」という強い思いが、心の底からわきあがってきたのです。人生って一回しかない。言いわけばかりしている人生なんて……私は嫌だ。

そう思ったとき、ゴールボールは実に最適なスポーツだったのです。

ゴールボールは全員が目隠しをした状態でプレーをします。「すみませーん。見えないからボール取りそこねました。」なんて言いわけは、通用しないスポーツなのです。見えないという条件は、みんな同じ。この見えないことが言いわけにならないスポーツで世界を目指してみたい。私の心のスイッチが入りました。

〈出典 『浦田理恵 見えないチカラとキセキ』を書き改めたもの〉

【著者】浦田理恵（うらたりえ）

一九七七（昭和五二）年

ゴールボール選手。熊本県の生まれ。

【著書】『浦田理恵 見えないチカラとキセキ』（共著）

【著者】竹内由美（たけうちゆみ）

一九七五（昭和五〇）年

障がい者スポーツ選手雇用センターに勤務。大分県の生まれ。

【著書】『浦田理恵 見えないチカラとキセキ』（共著）